

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水域

NO. 6 ホテル・アムステルダム・オークラ&ハノイ・サクラホテル



ホテルオークラの近傍。
日没とともに静寂に包まれる



ハノイ・サクラホテル。
看板も日本語



サクラホテル近傍。
バイクはライフラインだ

2015年11月、アムステルダムの水道を見学する機会があった。正確には「機会を戴いた」というべき話で、ヨーロッパ屈指の規模の展示会である、『アクアテック・アムステルダム』を見学し、加えて「オランダの砂丘水道を勉強しなさい」というご指示を某大先生から戴いたからである。

この取材は、それまでの43年間、日本での取材を通して培ってきたつもり「水道施設の常識」を根底から覆すものだった。その話は後回しで、今回はなぜかホテルの話である。

ホテル・オークラのエグゼクティブ・ルームは、サービス料や付加価値税（消費税）を含めると1泊5万円だった。もとより、私はそういう価格のホテルに宿泊できるような生活を送っていないし、そういうルームに余り価値を見出していない。しかし、フロントで「エグゼクティブ・ルームの予約をもらっているが、それで良いか？」と聞かれ、「ノウ、もっと安い部屋を」と言うべく、もごもごと言葉を探しているうちに、横から「OKOK、そうしなさい」と言われると、結局、そうになってしまう。旅程の全部を手配してもらっているという自立性の無さがそうさせるのだ。

加えて、商売柄、1度は何でも眺め経験しておこうという気持ちが、安かろうが高かろうが、どこでもOKの気持ちにさせるのである。

結局、寝室の隣に大きなソファの居間なのか会議室があることと、ベッドがやたらデカイことと、トイレまで遠いことと、浴槽が大きすぎてなかなかお湯が貯まらない、というのが、エグゼクティブ・ルームだった。要するに、平均身長180cm以上というオランダ

人に合わせて、全てが大きいのである。数 10 m²はあろうかと言う広々とした 2 部屋で、夜の 2 時頃から 5 時頃まで眠れないという、大して楽しくもない夜を 4 日間過ごした。

それから 1 年半、念願だった旧北ベトナムのハノイを訪問する機会を得た。2016 年 9 月に開設した日越大学 (J V U) に、立命館大学の神子直之教授、佐藤圭輔准教授、吉川直樹講師が特別講義をするという (前回参照)。訪問時期は 4 月の連休前で、値段もホテルの空き具合も好都合である。

ハノイのホテルは「サクラホテル」。名前からしていかにも日本のビジネスマン向きである。手配いただいた方から、「英語が通じない、というか、日本語しか通じないそうです」と言われた“謎のホテル”である。しかも、サクラホテル I・II・III があるらしい。

そのホテルは、本当に英語が通じなかった。何とか身振り手振りで・・・、なんてものではない。簡単な数字すら通じない。そして、日本語が普通に通じたのである。それも、簡単な内容以上のものが通じる。勿論、ホテルマンは全員、現地の人。

部屋はと言えば、極めてオーソドックスなビジネスホテルの造りで、風呂は浴槽があつて、なんと浴槽の外に洗い場があるではないか。ここまで言えば、もうお分かりだろう、洗浄機つきのトイレだったのである。

多量飲酒者で排泄系に悩みを抱えている私としては、泣けるほど嬉しかった。値段は予約条件にもよろうが、1 泊 6000 円。しかも、最上階に吹き抜けの大浴場があつた。筆者が利用した「サクラ III」の吹き抜け大浴場は、冷たくて水温管理がダメだったが、不満を言う気にはならない。

大浴場の隣のレストランの朝食メニューは約 20 種類。朝からカツカレーや生姜焼き定食を食べるか？という話は兎も角、ヘビーな朝飯を食べる態勢が素晴らしい。毎朝二日酔いの筆者は、当然のようにフォーを食って荒れ果てた胃袋をいたわっていた。

英語が通じないのだから、当然、欧米人は利用しようがない。5 泊した間、日本人のビジネスマン以外は見かけなかった。ネット情報によれば、日本ではパチンコ屋を営んでいる会社が進出した、とあるが、それは確認していない。

日本人専用のビジネスホテルの経営が成立しているという事、その店舗が増え続けているという事に、日越のビジネスの一体化を強く感じた、は良いのだけれど、やっぱり「日本人村」かあ、と自らを嘆かわしくもある。「英語で戦えますか!？」と言われて、「戦えるわけじゃないじゃない」が答えとして、それを情けないと言えるか？純日本式ビジネスホテルが象徴する日本式ビジネスモデルで、ベトナムも日本も、双方が良ければ進展するのではないか、という気もする。英語が常識という向きにはローレベルの話ではあろうが。